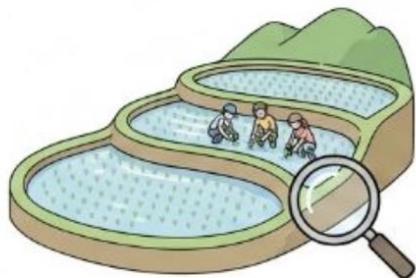


<学生団体のタイプ>

学生専門部会に参加した、12の学生団体をその活動内容や活動範囲によって3つのタイプに分類した。パターン1や2は地域課題の解決によりフォーカスした取組である一方で、学生の関与を広く創出しているのはパターン3である。

パターン1 単拠点・特定課題重点型



拠点を1つに絞り、その拠点独自の課題解決に寄与する活動を中心に行っているタイプ。今回の参加団体はいずれも棚田保全を目的としていた。

パターン2 多拠点・複合地域おこし型



活動拠点は複数あり、地域おこしの活動もあわせて行っているタイプ。農家や自治体以外のステークホルダーとの関わりも多い。

パターン3 農業実践・援農支援型

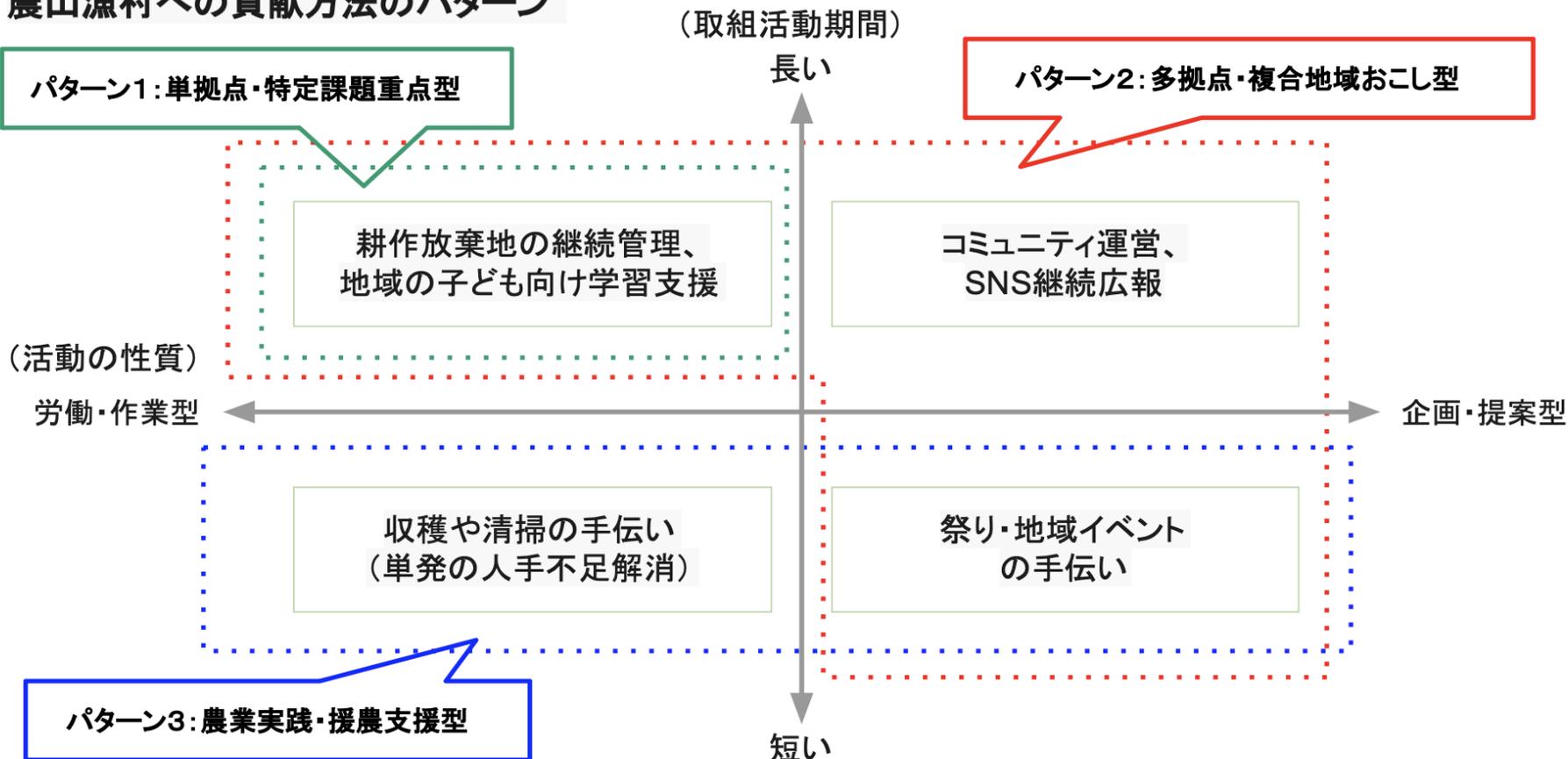


実際の農作業を手伝う、援農を行っているタイプ。最も敷居が低く、大学内でも農業を行っている団体や、一部援農以上の活動をする団体も存在する。

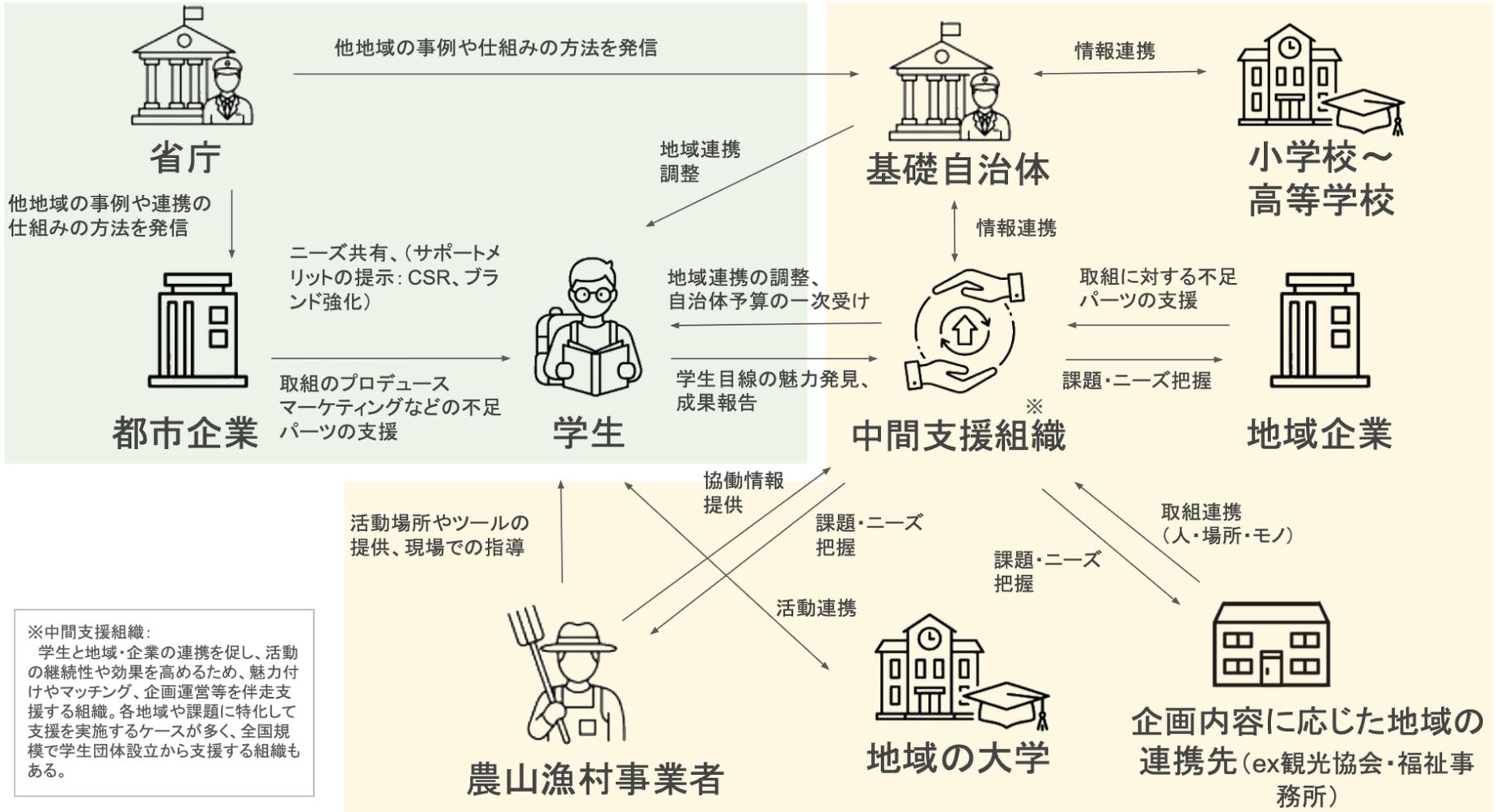
<貢献方法の類型化>

地域への貢献方法パターンを活動の性質及びコミットする活動期間の長さで分類した。それぞれ学生団体のタイプによって貢献パターンが異なるが、学生団体のタイプでも示したとおり、取組活動期間が短い方がより参加人数を集めやすいという傾向である。一方で、取組期間が長くても、活動のミッションが明確である場合においては、団体の代替わりがあったとしても引き継ぎやすいという理由から継続性を担保できる傾向にある。

農山漁村への貢献方法のパターン



学生の取組が効果的かつ継続的であるには、地域のニーズと学生の意向のバランスをとる必要性を理解する一方で、学生および地域事業者だけではそのバランスをとることや、客観的合理性のある活動を築きあげていくことが難しい場合もある。自治体や中間支援組織、また地域／都市部の企業などと連携したモデルを構築することが継続的かつ地域課題解決に効果のある活動につながっていく。下記はその体制の全容を網羅的に図したものである。活動の段階に応じて体制は規模も含め最適なモデルは様々であるため、具体事例の東大生地方創生コンソーシアムがまとめる事例集(P.17～)と合わせて参考にしていきたい。



※中間支援組織：
学生と地域・企業の連携を促し、活動の継続性や効果を高めるため、魅力付けやマッチング、企画運営等を伴走支援する組織。各地域や課題に特化して支援を実施するケースが多く、全国規模で学生団体設立から支援する組織もある。

①農業分野での事例(福島県伊達市)

活動概要

プロジェクト名

五十沢あんぼ柿プロジェクト

学生の属性

運営学生3名(法学部3年1名、教養学部2年2名)
参加学生7名(学部1年3名、学部3年4名)

解決する課題

福島県伊達市五十沢地域はあんぼ柿発祥の地で、100年の歴史がある。一方で最盛期は600tあった出荷量は、今では120tになっている。この生産量の減少に加え、耕作放棄地の増加や、担い手不足、後継者不足という課題が存在している。その背景には、五十沢地域の関係人口の少なさや、既存のマーケット(元来JA、直売所、贈答用が主なマーケットだった)の縮小がある。

取組概要

①長期現地滞在型政策提言プログラムの実施
五十沢という地域を知り、五十沢の未来について考えるために、大学1年生3名を対象に夏休み2週間のヒアリング、政策提言を行った。1年生参加者3名は「五十沢地域の農業の持続可能性」について2週間検討し、政策提言を行った。また、メンターとして6名を派遣し、3学年と幅のある学生の地域との関わりを創出した。

②学園祭での広報・販売
2025年11月22,23,24日に行われた東京大学の学祭駒場祭にて、あんぼ柿、あんぼ柿お汁粉、あんぼ柿を使用したシューレン、ケイクを販売した。

③あんぼ柿作り体験
①に参加した学生9名で五十沢へ再訪し、あんぼ柿作り体験を行った。

取組場所

福島県伊達市五十沢地域

実績

①では、市長を中心に市役所約10名、地元の方々約40名への政策提言を行った。政策提言は報告書(関連URL)を参照
②では、約50万円の売上をあげた(あんぼ柿販売個数400)
③では、3500個のあんぼ柿の生産を行った。柿の木6,7本に該当する。この柿の木は、生産者の方のキャパシティの問題から、あんぼ柿にすることは予定されていなかった。そのため、直接的に耕作放棄地になりかけていた圃場を少しではあるが、存続させている。

学生の課題

マーケットに売り出していく知識、ノウハウがない。

取組の特徴

昨年の冬に運営学生が現地であんぼ柿を作る体験をしたことからこのプロジェクトは始まった。学生が農業に関わることは、東京で過ごしているとまずない。そこで、まずは農業を身近なものとして感じてもらうことを目的としている。ただ、単に体験にとどまらず、活動に参加した学生が次は価値の担い手となって、東京や他の市場へ自分たちで作ったあんぼ柿を展開していくことまでも目指している。

現地の生産者の方と事業者の方で構成される合同会社BOTAと協力し活動を行っている。

特徴としては、授業期間がある大学生の活動に合わせて、①夏休みに2週間のプログラム②学祭での出店③学期中の土日という期間設計をしていることが挙げられる。

関連URL

五十沢ワーキングホリデー報告書
https://drive.google.com/file/d/1w3bnBqYX3qxde6bryER_MVBwGtasw_jX/view?usp=sharing

①農業分野での事例(福島県伊達市)

イメージ等



市長への政策提言



あんぽ柿、あんぽ柿
お汁粉の販売



干場で柿を干す



海外のシェフとの意見交換

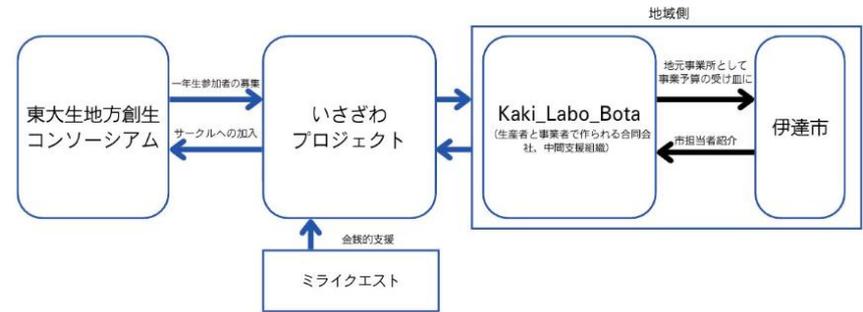


直売所アプリについての議論

【共同企画を行なっている方からのコメント】

五十沢あんぽ柿プロジェクトの取り組みは、あんぽ柿発祥の地としての五十沢地区の生産者の皆さんのプライドを呼び覚まし、閉じていた地域社会を拓ききっかけとなりました。そこから地区の生産者が次の100年に向けた継承へのビジョンが見出されてきました。ワーホリでの地域との出会いから、あんぽ柿づくりへの共創への展開は、コンソーシアムの組織としての強みとして単年度の取り組みではなく、地域とともに継続される仕組みに発展する可能性と期待もっています。

連携のモデル図



一年間の活動の収入と支出(単位:円)

支援元	支援額	支出費目	支出額
ミライクエスト	250,000	交通費	300,000
Kaki_Labo_Bota	350,000	宿泊費	200,000
		移動費(レンタカー代)	100,000

自己負担割合: 10%

①農業分野での事例(福島県伊達市)

